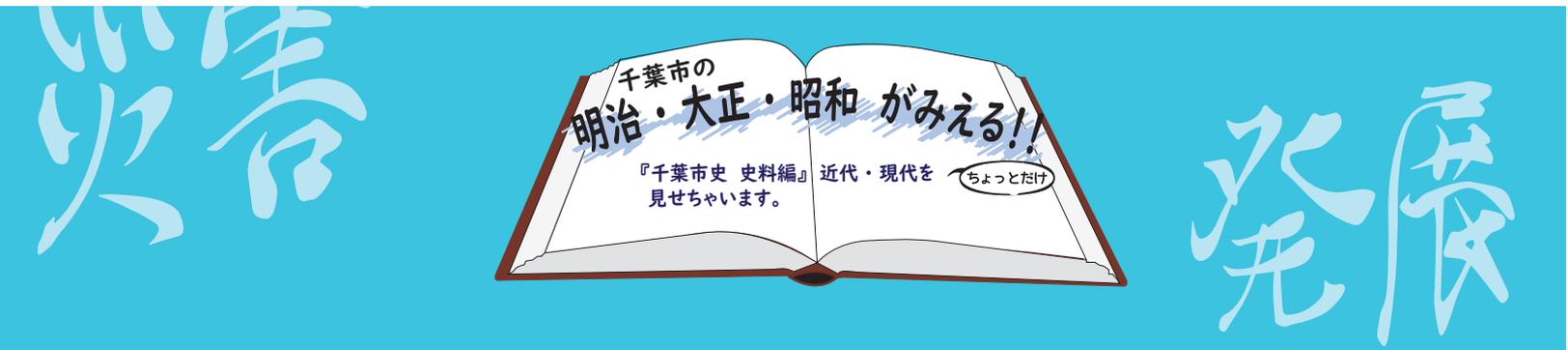




編さん便り

千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!.....1-3
 第9回 千葉町(市)大火
 第10回 日立航空機進出と「千葉方式」
 【ちば歴史散策】薩摩芋との関わり 澱粉製造業と千葉...4

chiba-shishi News Letter NO.28 2022.3



連載中の「千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!」、今回は第9回・第10回です。『千葉市史 史料編10 近代1』掲載史料から更に発展させ、現在調査中の『近代2』の範囲までを視野に入れて、解説していただきました(2・3ページ)。

中村委員の「千葉町(市)大火」では、『千葉毎日新聞』紙上で「千葉の火事といえば大火のみ多く」といわれた千葉町の火災についてご紹介いただきました。『近代1』で扱った明治期以降、昭和6年(1931)の大きな火事にいたるまで、千葉町(市)をおそった火事の状況や、当時の人々の対応について、新聞記事などから読み解いていただきました。町が大きくなればなるほど、どうしても発生してしまう火災は、いつの時代も人々の日々の生活に大きな影響を与えます。

小林委員の「日立航空機進出と「千葉方式」」では、千葉市・千葉県の発展を語るうえでは欠かせない、湾

岸地域の埋立と工場誘致に関わって、高度経済成長期に行われた「千葉方式」と呼ばれる方式と、その先駆ともいえる日立航空機製作所の進出について、千葉市役所の歴史的公文書に残された日立航空機製作所と千葉市との契約書などを中心として、解説をしていただきました。日立航空機製作所は、第二次大戦中、零式練習用戦闘機や航空機エンジンを製作していました。昭和28年には、この工場跡地に川崎製鉄が進出します。

いずれの事例も、史料から当時の人々の置かれた状況がよくわかる解説を付していただきました。ありがとうございました。

今後『千葉市史 史料編11 近代2』で扱う内容が固まってきましたら、また先生方のご解説を掲載したいと思います。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

資料
求ム

『千葉市史』編さんのため、古い資料・昔の写真などの情報を集めています。
 ご家庭で撮影されたスナップ写真も、当時の「千葉」をみることでできる貴重な資料です。
 いわゆる「口文書」も大歓迎です。
 また、直接お話を伺うことも行いたいと考えています。戦時中の体験、幼い頃の記憶など、千葉市域に関してお話しただけの方がおられましたら、ご連絡ください。
 ご提供いただける資料、伺ったお話の内容の扱いには、十分配慮致します。
 皆さまからの情報提供をお待ちしています。

第9回 千葉町（市）大火

千葉市史編集委員 中村 政弘

「千葉の火事といえば大火のみ多く」（千葉毎日新聞）といわれた千葉町（市）の火事については、『千葉市史 史料編 10 近代1』で、明治7（1874）、14、25、33、37年の新聞記事を掲載しています。

ここでは、それ以降の火事に関わる記事を紹介します。明治41年11月17日の「千葉毎日新聞」によると、14日の午後8時40分、千葉町院内より出火、全焼15戸・半焼1戸の被害を出し、10時20分に鎮火しました。地元の消防の他に鉄道連隊の兵士も繰り出しました。非常に激しい西風で、千葉神社（現中央区院内1丁目）や南北道場町にも火の粉がおよびましたが、前年の登戸・寒川大火ほどの被害にはなりませんでした。この当時、千葉停車場（駅）は現在の東千葉駅近くにあり、停車場道に林立した電柱は、県庁に勤める工夫の尽力によって、被害はありませんでした。損害は8000円から1万円といわれ、罹災者16名の中には女性の名前が2名あげられています。火の元は寒川大火より移転して来た旅人宿、隣の菓子製造業とかいわれたようです。罹災者であった土木請負業者が50円を寄付していました。この当時は、新聞に火事のお見舞い御礼の広告を出しています。この火事では千葉税務署、渡辺酒店、有吉堂医院、加納屋支店、千葉毎日新聞社などのほかに、個人も名前をだしていました。

大正4（1915）年の新聞記事を読むと、大正時代に入ってから火災の件数が、少なかったことがわかります。しかし、大正14年9月2日の「千葉毎日新聞」には、数年来火事の無かった千葉市（大正10年市制施行）内に起こった大火の記事が掲載されます。8月31日、午前2時頃千葉停車場新道に大火が発生し、全焼10戸、半焼1戸の被害を出しました。鉄道連隊、陸軍歩兵学校などの約300名も出動するほどの大きな火災でした。この火災でのお見舞い御礼の広告は、大熊医院、京成電気軌道、第九十八銀行、房総日日新聞社などがだしていました。当時の京成千葉停車場は、現在の中央公園にありました。

昭和に入ってから、昭和6（1931）年9月29日、午前4時吾妻3丁目（現中央区中央）の元県議経営のデパート近くから出火し、10棟を焼いて午前5時20分鎮火しました。損害は11万円の見込みで、「十年來の大火」と報じられました（『東京日日新聞 房総版』9月30日）。開店したばかりのモスリン店も類焼しましたが、鉄道連隊、気球隊、陸軍歩兵学校からの援軍もあったのです。この年の放火件数は県下54件の多さです。千葉市の消防組は大和橋署を常設として、14署で警備にあたり、器具は自動車ポンプ3台、オートバイポンプ4台など、消防手315名で消火にあたりました。

昭和8年は火災件数8件と少なかったのですが、82棟の被害があり、昭和5年の20倍近く、損害も48万円という金額にのぼっています（『千葉市年鑑』）。



写真1 『千葉毎日新聞』昭和6年9月30日

第10回 日立航空機進出と「千葉方式」

千葉市史編集委員 小林 啓祐

「千葉方式」という言葉をみなさんご存じでしょうか。1974年刊行の『千葉市史 現代編』にも掲載されていますが、千葉県内の自治体史のみならず、例えば中村政則の『戦後史』（岩波新書,2005年）にも登場します。「千葉方式」は、高度経済成長期に埋め立てをする際に事前に進出企業にお金を納めさせ、そのお金でもって千葉県が埋め立てを行った方式です。高度経済長期は日本全国で埋め立て地に工場が建てられた時代でもあり、「千葉方式」はその先駆例として取り上げられることが多いのです。

千葉市のみならず、千葉県の工業化促進に寄与したこの「千葉方式」ですが、戦時期の日立航空機製作所が千葉市に進出される際にも似たような方式がとられています。その方式の存在自体はこれまでも知られていましたが、今回、市役所に所蔵されていた歴史的公文書史料群の中にその模様がわかる一連の史料が見つかりましたので、ここでご紹介したいと思います。

写真2（契約書）抜萃は1940（昭和15）年11月1日に千葉市長と日立製作所及び日立航空機株式

会社（以下、日立航空機）との間で取り交わされた契約書です。契約は、12条にわたります。さきほどの「千葉方式」と似ている部分は「第五條」です。冒頭を抜粋します。

「第五條 本件埋立ニ要スル免許料、工事費、工事施行区域ニ於ケル漁業権其ノ他諸権利ノ補償費用及工事ノ遂行ニ伴ヒ必要ナル一切ノ経費ハ乙ニ於テ之ヲ負担スルモノトス〔後略〕」

この文中の「乙」とは日立航空機です。つまり、費用負担はすべて日立航空機が請け負うことになっていたのです。そして、「第七條」ではこう書かれています。「第七條 本件埋立工事ニ対シ竣功〔中略〕ノ認可アリタルトキハ甲ハ其ノ造成セラレタル埋立地を遅滞ナク乙ニ譲渡スルモノトス」

埋め立てるのは千葉市側（史料中の「甲」）ですので、埋め立てが終わったら千葉市から日立航空機に譲渡することになっています。工事にかかる費用を進出企業が負担し、埋め立てを行政が行い、埋め立て完了後に進出企業に譲渡する契約は、「千葉方式」に酷似していることがわかります。日中戦争開戦後という時代背景に留意すべきですが、この契約によって進められた湾岸開発は、なかなか重工業の進出がかなわなかった千葉市湾岸を大きく変える転機となりました。この方式が戦後の「千葉方式」に受け継がれたかどうかは定かではありません。ただし、関係者の知識としては必ずこの方法は蓄積されていたことでしょう。

歴史的公文書群の中には、このほかにも日立航空機製作所進出に係る史料が色々残されています。例えば当時「極秘」扱いされた、日立航空機製作所千葉工場の平面図に関する文書です（1941年12月1日 千葉市歴史的公文書24-1）。軍需工場でもあったため、「極秘」扱いとなつたのでしょうか。これ以外にも、「普通鋼材配給券下附証明願」として、工場建設に必要な鋼材（ここでは鉄道のレール）を優先的に融通してもらうための書類も「秘」扱いになっていました。一連のこれらの史料は、この時期の千葉市湾岸の重要性を物語ってくれる一級の史料と言えます。

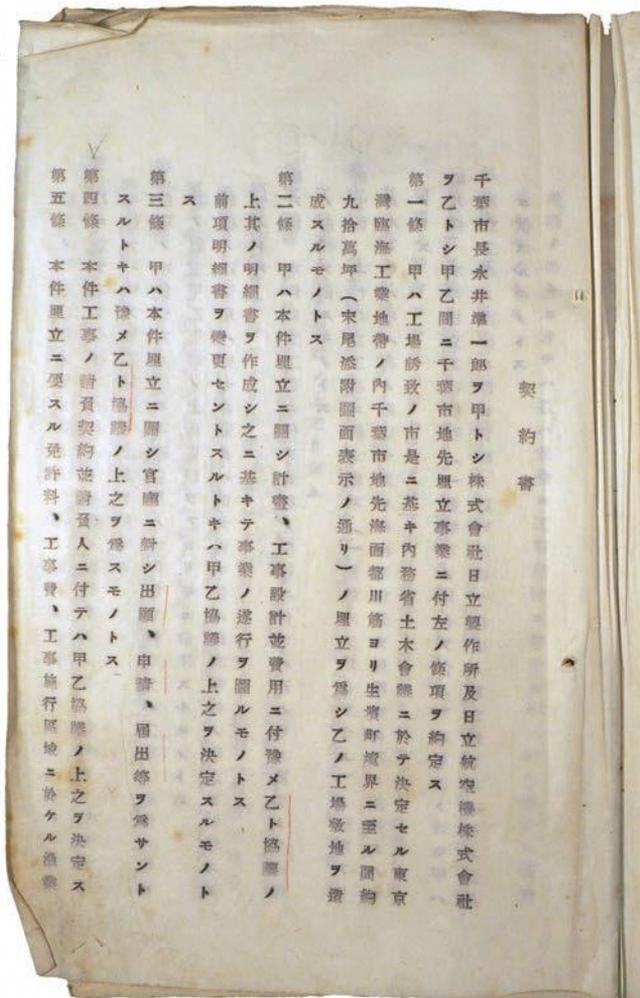
写真2

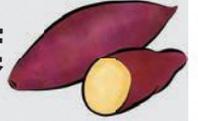
「契約書」（抜萃）

1940（昭和15）年11月29日

（千葉市役所歴史的公文書24-2-1

「埋立事業契約書」昭和15年度作成 より）





江戸時代、救荒作物として注目され、その栽培が広まった薩摩芋。現在の千葉市域はその主要生産地となっていました。幕張あたりは「起立根元」の村とされ、生産された芋は江戸で高値で取引されていました。

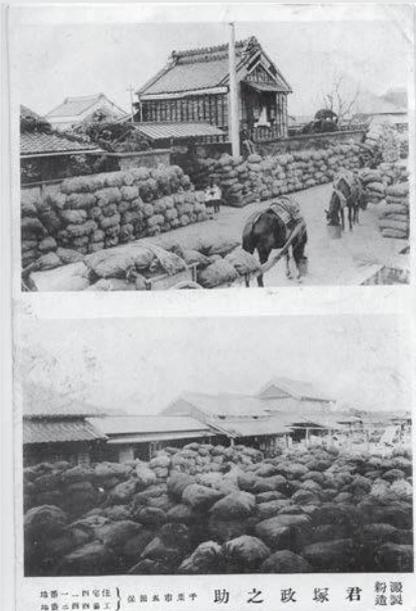
明治に入ると、当地域で生産された薩摩芋は澱粉製造にも用いられていきます。薩摩芋を原料とした澱粉の製造は、千葉市域が発祥とも言われ、天保年間には「手ずり法」による澱粉製造が行われ始めていたとされています。明治20年(1887)ごろには次第に機械化されてその生産量も増加、明治42年ごろからはそれまでの人力から石油発動機の利用へ変わっていったことで更に発展しました。大正15年(1926)の『千葉県千葉郡誌』には、「近来其の生産著しく増加し、品質亦優良にして、本県の特産物として推奨せられ、

の製造戸数は123、11,362,320斤を製造していたとされ、「工産物総生産額の同平均額の四割六分余を占む」とも記されています。

掲載した絵はがきは、澱粉製造業を営む五田保の「君塚政之助」のもので、この絵はがきの製作年次等、詳細は不明ですが、宛名面に捺された標語印の文言が使われていた年代、そして新聞記事に君塚政之助が登場する年代などを合わせて考えると、昭和7年(1932)前後ではないかと推測されます。写真にみえる袋に澱粉が入られているのでしょうか、道の脇、敷地の中に大量に積まれた様子からも、澱粉の製造量がとても多かったことがわかります。

五田保は、澱粉製造業が盛んな地域だったとされ、明治26年4月2日付『東海新聞』には、千葉郡蘇我町今井区・五田保辺りの甘藷澱粉製造家たちが、今年澱粉の価格が騰貴するだろうとして競争した結果、製造量が増えたために「資本の乏しき者」は「大坂地方等へ輸出販売」するなど販路の拡大をはかっているという記事も載りました。同43年には千葉郡甘藷馬鈴薯澱粉改良同業組合設立も掲載されています。

そんななか、大正13年には、日本初のブドウ糖製造に成功した参松工業が千葉に誘致されます。参松工業はその原料調達のため、かねてから千葉の澱粉製造業者に助成を行っていたとされています。君塚のような澱粉製造業者らが澱粉を卸していたのかもしれませんが。一方、同15年には、澱粉製造業者の流す漂白薬が周辺の海岸の海苔や稚貝に被害を与えたとの記事も新聞紙上に掲載されました。「薩摩芋」は良きにつけ悪しきにつけ、周辺の地域に大きな影響を与えていたということができましよう。



絵はがき「澱粉製造 君塚政之助」
(郷土博物館蔵)

年々東京、京都、大阪を始めとし、群馬、茨城、三重、愛知の各県へ盛に移出せられ、大正九年於て其の移出額十九万円余に達せり。主として絹織物の機糊、又は菓子類、蒲鉾或は齒磨等に使用せらる。」と記されています。主産地は蘇我町、千葉町、検見川町、幕張町、津田沼町、犢橋村等でした。大正8年には、千葉郡内

お宅にのこるその資料、
捨てないで！！



古い書付や写真、民具類など、台風などの自然災害やそのほかの事情により濡れてしまったり、汚れてしまった資料がありましたら、その対応のお手伝いできればと思います。これらを捨ててしまう前に、可能であれば、下記市史編さん担当までご一報ください。お宅に残る歴史や思い出を、少しでもよい形で後世に残していけるよう、できる限りのお手伝いをさせていただきます。

ちば市史編さんより28号をお届けします。次年度も市史研究講座・中級古文書講座を開講いたしますが、日程等調整中のため、本号ではご案内を掲載することができませんでした。各種講座についての詳細は、千葉市立郷土博物館HPや公式Twitter、市政だよりにてご確認ください。多くの方のご参加をお待ちしております。

国際情勢、いまだ続く新型コロナウイルス感染症の影響など、あまり明るいとはいえない世の中ですが、そんな今だからこそ、「歴史を知ることでみえること」を少しでもお届けできればと思います。(え)

あとがき